

書評02

小山 哲・藤原 辰史 著

『中学生から知りたいウクライナのこと』

ミシマ社/2022年6月刊/208ページ/1600円+税
ISBN 978-4-909-39471-2

評者：岩男 望

京都大学大学院農学研究科博士後期課程



本書は、2022年2月24日のロシアのウクライナ侵攻を受け、本年6月、オンラインイベントで行われた講義と対談、そして書き下ろしの寄稿をもとに緊急出版された。ポーランド史を専門とする小山哲氏、そして食と農の現代史を専門とする藤原辰史氏の両者が、ウクライナをめぐる歴史的背景の分析を軸としてさまざまな観点からウクライナ侵攻について論じる全5章からなる一冊である。

第1章では、筆者らが発起人となり活動を行っている「自由と平和のための京大有志の会」が侵攻の二日後に発表した「ロシアによるウクライナ侵略を非難し、ウクライナの人びとに連帯する声明」が示されている。これは、のちに第4章で語られるように、私たちが日常生活で用いる言葉で表現された、ロシアによる侵略に対する強い非難と、ウクライナの人びとや戦争に反対する人びととの連帯を示す声明である。なお、声明文は複数の言語に翻訳され、同会のウェブサイトにて見ることができる（注1）。

第2章では、本書の基礎となる歴史学が現在のウクライナを巡る事態を理解するためにどのような意義を持つのか、歴史的背景の理解がなぜ必要であるのかという理由が説明されている。

第3章では小山氏より、ポーランドからみた「地域としてのウクライナ」を巡る中東欧の複雑な関係性が宗教、言語など複数の観点から詳述されている。本章では中世まで歴史をさかのぼり、ウクライナが複数の宗教や政治勢力が交

じり合い衝突してきた地域であることや、ロシアとウクライナが強い緊張を抱えた関係性を持ち続けてきたことを指摘する。また、現在のウクライナの領域は、かつてポーランド領であった場所も多く、これまでにウクライナ難民を入れているポーランドとウクライナの間に対立があったことも示される。このように、ポーランド側の観点から歴史を見ることで、様々な視点から地域を見ることの必要性が浮き彫りにされている。

続いて、藤原氏から大国に挟まれた小さな国々に目を向ける歴史観の重要性が示され、関係の複雑さを理解しないままに状況を単純な二項対立図式と捉えて判断を下す態度への疑問が呈される。また、1932年から1933年にかけてウクライナ地域で起きた「ホロドモール」といわれる人為的な大飢饉について言及し、「ヨーロッパのパンかご」ともいわれる豊かな土壌をもつウクライナの農業・食の歴史の観点から分析することの重要性が述べられている。

第4章では、オンラインイベントでの対談と質疑応答の内容がまとめられている。まず筆者二名の対談形式で、第1章で示された声明文作成の背景が語られる。同会から寄せられた声明文は、できるだけ専門用語を避け、日常生活で使われる言葉で表現されており、ロシアによる侵略に対する強い非難と、複雑な歴史的背景に対する考えが圧縮された内容となっている。さらに、ロシアに対する経済制裁に加わるなどす

でに戦争の当事者となっている日本において、今回の悲劇が武装強化を推し進める論へと繋がられていることに対する異議が述べられる。また、質疑応答の箇所では、簡単に答えが出ない状況についての質問に対して筆者の誠実な応答がなされている。

第 5 章では、声明文について、様々な立場に置かれているウクライナの人びとに関して、声明を発する側が「普通の暮らし」のあり方を一方的に想定しているようにも読めるという批判を受けた筆者らが、改めて人びとの暮らしの中にある構造的暴力に着目する。ウクライナで暮らす人々、そしてウクライナに関係する人々は構造的暴力のもとに置かれており、その構造的暴力の理解のためにも歴史的背景への理解が不可欠である。そして、弱い立場にある人々が苦しめられるのが戦争であり、その歴史が繰り返されているという意味で、強い非難がなされている。

以上、本書の内容を概観してきたが、ここでタイトルに含まれる、「中学生から知りたい」という言葉の意味に触れておきたい。筆者が本書において意図したのは、専門家だけでない幅広い読者が理解できるような書き方をすることであり、「知識をカジュアルダウンしてわかりやすく伝える、とは少し異なった方向」で、「むしろ、私たち大人の認識を鍛え直す」(6 頁) という意味が込められている。たしかに、第 3 章における地域としてのウクライナの歴史を詳述する内容は特に難解である。本書では、歴史的な視点での報道の少なさについても触れられているが、ここで示されるような複雑な歴史は、受け手の感情に訴えかけるような、わかりやすく簡潔な表現で情報を伝える性質をもつメディアでは言及しきれない内容も含んでいる。「中学生から知りたい」というタイトルを見て、現在のウクライナを巡る状況についての簡潔な説明を求めて本書を手に取り、その期待が裏切られたと感じる読者もいるかもしれな

い。しかし、本書は、ウクライナを巡る現状はロシアとの単純な対立ではなく、複雑な歴史的背景を経て起こっているということを学ぶ入口となる一冊になるといえる。加えて、第 5 章で示される読書案内 (192 頁) もさらなる学びに役立つであろう。また、自由と平和のための京大有志の会のタイムライン (注 2) では、現在に至るまでのウクライナに関する情報が随時アップされており、密度の濃い情報に触れることができる。

そして、本書に通底する筆者の考えは、本誌のテーマでもある日常生活の「くらし」から考えるという態度にもとづいたものである。同会から出された声明文では、ウクライナの人々の日常が一方的に破壊されたことへの非難から始められている。ウクライナの人々が生活を破壊される様子を報じるニュースによって感情を揺さぶられながらも、離れた地域に暮らす私たちは日常生活を送り続けている。歴史が繰り返してきた問題のひとつは、戦場から離れた地域に暮らす人々の当事者意識や「胸の痛み」が持続しないことではないかと藤原氏は指摘する。悲劇に対して一時は胸を痛めたものの関心を失っていった人々が、日常を破壊され一生痛みを抱え続ける人々を置き去りにして自らの日常を回復し、第二の暴力の加担者になっていくことを避けたいという思いが本書には込められている (34 頁)。

ウクライナ侵攻開始から 10 ヶ月が経った今、本書を通して、自分の胸の痛みは持続しているだろうかと問い直さねばならない。

注 1: 「ロシアによるウクライナ侵略を非難し、ウクライナの人びとに連帯する声明」 (URL: https://www.kyotounivfreedom.com/solidarity_with_ukraine/)

注 2: 「生きのびるために ウクライナ・タイムライン」 (URL: https://www.kyotounivfreedom.com/ukraine_timeline/)